

述から鑑みるに、当時においても、既に学会では血清肝炎の予後に注目し始めており、研究者達は、血清肝炎の予後の重篤性に対する危機意識を持っていたことが推察できる。

図表 5-2 昭和 39 年以前（～1964）の肝炎の予後に関する主な報告

| 文献番号  | 年             | 出所   | 内容  | 文献の種類 | 文献の性質 | 予後の重篤性 |
|-------|---------------|--|---|-------|-------|--------|
| 5-2-1 | 1947<br>(S22) | Scheinberg IH et al. Homologous serum jaundice. <i>JAMA</i> 1947; 134(10); 841-848   | Peter Bent Brigham 病院での一年間に及ぶ調査により、少なくとも 200 例の輸血もしくは輸血漿に 1 例は血清肝炎に感染すること、血清肝炎の原因のほとんどが輸血もしくは輸血漿であるとする 86 例に 1 例が血清肝炎に感染すること、および血清肝炎に感染した 15 例のうち 4 例が死亡し、その死亡率が 36%であったことなどを記載。  | 他     | 原     | ●      |
| 5-2-2 | 1953<br>(S28) | 今永一（名古屋大学）、田中義守「輸血後の黄疸について」治療 1953; 35(10); 1021-1026  | 輸血後に現れる黄疸について、輸血の停止と適宜の肝庇護処置により急速に消褪し、後に特記すべき程度の肝障害を残さないようであると記載。   | 他     | レ     | ○      |
| 5-2-3 | 1953<br>(S28) | World Health Organization. Expert committee on hepatitis first report. World Health Organization technical report series No.62 | 感染性肝炎および血清肝炎は前黄疸ステージと黄疸ステージの 2 つのステージに分けられ、多くの症例では無黄疸型肝炎が発症すること、典型的な症状として、食欲不振、吐気、嘔吐、腹痛、肝肥大、黄疸等があり、それらの症状が 1~10 週間続くこと、肝炎の症状が数年間持続するものはごく一部であること等を記載。   | 他     | 他     | ○      |
| 5-2-4 | 1953<br>(S28) | Murphy WP, Workman WG. Serum hepatitis from pooled irradiated dried plasma. <i>JAMA</i> 1953; 152(15); 1421-1423               | 調査の 150 日以上前に紫外線照射された乾燥人血漿を投与された 468 例のうち、血清肝炎の感染調査が行えた 180 例について、23 例（12.8%）に血清肝炎感染の症状が見られ、そのうち 7 例（30.4%）は肝炎が直接的な理由で死亡したこと、12.8%という感染率は輸血のみの場合の血清肝炎感染率 0.5%に比べて高いことなどを記載。   | 他     | 原     | ●      |
| 5-2-5 | 1954<br>(S29) | 楠井賢造（和歌山医科大学内科）「血清肝炎について」日本臨牀 1954; 12(10); 44-50  | 血清肝炎とみなすべき 18 症例について、血清肝炎の死亡例については 2 例を除き 16 例は全治したが、従来の報告によると、急性黄色肝萎縮症を起して死亡した例があり、その死亡率は ProPert : 42.8%、Cockburn ら : 42.8%、Scheinberg ら : 36.3%、Murphy : 30.4%、Spurling : 22.2%、英国保健省 : 22.2%、Grossman : 12.5%だったと記載 | 他     | レ     | ●      |
| 5-2-6 | 1959<br>(S34) | 小坂淳夫（岡山大学医学部第 1 内科）「流行性肝炎、血清肝炎の臨床」日本医学総会『日本の医学 1959 年・第 V 巻』第 15 回日本医学総会、1959.p.59-70  | 血清肝炎罹患後 6 か月から 1 年後に、33 例について肝生検を実施した結果、慢性肝炎と確信したものは 4 例（12.2%）。肝硬変は 3 例（9.1%）であり、著しく予後が悪いと報告。  | 他     | レ     | ●      |